

# 嬉泉の新聞

嬉泉の新聞／第12号／1989年（平成元年）2月20日発行／発行所＝社会福祉法人・嬉泉（東京都世田谷区船橋1-30-9（〒156）TEL03-426-2323・千葉県君津市袖ヶ浦町下新田1680（〒299-02）TEL0438-62-9121）発行人＝石井哲夫／編集人＝友田篤

## 資格制度

酒井縁男

社会福祉施設の事業活動は、人・物・財源が一体化され、それが相互に適切効果的に作用することによって円滑に推進され、新たな事業への積極的な取り組みと複雑多岐にわたる福祉ニーズへの的確な対応を可能とする。

ところで、わが国の社会福祉施設は、対象者特有の福祉ニーズや専門性に対応し、施設体系の専門分化、近代化がはかられ、その時代時代に大きな役割を果たしてきた。そして今日、戦後の社会経済構造の変革に伴う国民の生活意識や価値観の変化とともに、対象者の増加と福祉ニーズの多様化が進むなかで、その役割と機能は一段と強化され、対象者に対する処遇技術は一層複雑かつ高度化し、その専門性がますます要求されている。

このような社会福祉施設の位置付けのなかで、社会福祉施設の従事者の資質の向上と人材の確保が施設経営者と行政両サイドの大きな課題となっている。かかるときその梃子入れが図られ社会福祉士・介護福祉士の資格制度がスタートしたことは時宣を得て極めて有意義であり、その業務の専門性が高く評価されたものとして大きな期待が寄せられている。

しかしながら、資格制度の誕生によって施設職員の資質の向上が約束されたものとして安堵ばかりしてられない。それは、社会福祉士・介護福祉士の資格制度が業務独占では

なく名称独占の制度として発足したデメリットを認めざるを得ないからである。

そもそも資格制度は単に名称を付与し優越感や自己満足を与えるだけのものではなく、職域における業務の専門性と業務に対する高度な知識、技術、方法、適性等に着目し、業務の独占と身分保障にその優位性を認め、労働の質の向上と人材の確保を図ることに本来的な意義と目的があり、このことによって資格制度ははじめて有意義に機能するものである。

このような観点からこのたび発足した社会福祉士・介護福祉士の資格制度をより実効あるものとするためには、早期に名称独占から業務独占の資格制度に移行させることが斯界に残された大きな課題である。

近年、社会福祉施設経営者の多くが施設経営の基本的命題として、経営組織体の強化、財政基盤の確立とともに資質の高い職員の確保と養成に最大限の努力を払われていることは、当然のこととはいえ大いに評価されているところである。しかし、職員の資質の向上をより効果あるものとするためには、その職務に相応した妥当な社会的評価が得られるような雇用条件の確立、とくに待遇の改善により積極的に取り組み、資格制度の本来的意義が達成されるようとの認識をより強くしているところである。

（日本社会事業大学事務局次長）

昔の人が言った言葉で、「男は外に七人の仇がいる」というものがある。世間を渡っていくには、そのくらしいの沢山なマサツがあるという意味と想っているが間違いないことだろうか。

社会福祉施設を設置し運営してみようとは、個人的に施設経営をしようとすれば、良く言う人より、悪く言う人が多いということを感じる。

何しろ、大学を出てから、社会福祉施設の設置と経営を夢みていた私には、やりたいことが一杯あって、それを次から次へと実現しようとしたのである。私にとつての社会福祉施設は、言わば私の表現であるから、容易なことでは妥協したくないという思いなのである。しかも人生には限りのあることで、次第に年もとり、体力も気力も衰えていくことは当然なことなのである。

しかし、意外に私は戦斗的であり、意欲的なのである。私の接する人たちは、施設の中に住んでいても世界一幸福にしてあげたいという想いで一杯なのである。キザと思われるようなことでも日頃平気で行なえるようになってきたようである。

この間、親と子と職員の合同新

年会を催した。親と子が家族で祝うべき新年会が、職員と一緒に施設で祝うことになったと言うと、いささか惨めに感じられるかも知れないが、およそ人間離れして暮らして来た子どもたちが一同に会してパーティを行うなどということも、学園創設時から見ると今昔の感にたえない事柄なのである。そして、これも成功させることが出来た。このパーティの最中、私も直接、陣頭に立って指揮をして来た。「指揮官機先頭」という、困難なことには率先して当たる

## 施設経営の創造性

(その3)

石井哲夫

リーダーの気概を示したつもりであった。畏友である明治学院大学三和治教授などは、私の考え方を「独断と偏見」などとカラかうが、私としては、十分諸方面を配慮した上での実践を行っているつもりである。

さて、悲しいことに、本稿執筆中、武蔵野東学園の創設者である北原キヨ女子の逝去が報じられた。三菱財団の審査員として、学園を訪れてお目にかかったの

が、もう三年前となったが、昨日のこのように再生されてくる。「ともかく、思い切って、考えられたことを実践されましたね。」と言う私の言葉に、「キラリ」と涙を浮かべた女史の訴えるような顔を忘れることが出来ない。そのうちに我学園に、武蔵野東学園を経過して来た人たちの状況をみると、教育実践の理論や技術については、私とは大きく異なったものを感じたし、その被害を訴える人もいたが、私としては、裸一貫、個人の努力で、ここまで仕事をし

て来た指揮官機先頭の女史を広い立場で戦友として認めたい。残された関係者は、今まで女史のなし得なかった社会へのパイプを太くつけて、真の自閉症者の教育・福祉の増進に寄与して戴きたい。今は、女史の冥福を祈るのみである。さて、「指揮官機先頭」に話を戻すと、一番辛いことは、「引き際」とか「転進」の判断なのである。進め、進めのかげ声をかけている時はよいが、これが全体に影響を及ぼし、全体が、この指揮官

の統制の下で、動きはじめた時、指揮官ののぞまない動きをするこことが出てくる。中には不屈者がいて、全て指揮官に責任をなすりつけて、部下に対して、自分の思うことを押しつける者がいる。先頭に立つ者としては、中間管理職を支持していかねばならないので、多少の暴走は大目に見ることになる。時には威勢のよいのがいて、一人で背負った気になって勝手に動こうとする。どうも大集団となると、職員の自発性を殺さないように自己静止的な指揮官になりやすいようである。

ここで恥も外聞もなく、指揮官機は「退却」や「転進」の判断をした時には実行をしていかなければならない。

要するに私は指揮官機を役割として、全体の調整と方針への決断をするものと割り切っている。

一人の人間の器量のさほど大きなものではない。たまたまめぐり合わせた職員たちにはお気毒様と言いたいような粗末な出来映えのことしか出来ないことがある。しかし、この世は腕一本、全力投球しても、よく言われることの少ない民間の社会福祉事業というものであるということを肝に銘じているのである。

# ひかりのタイムス

独立第6号

「嬉泉より二人の議員  
相次いで当選!!」



▲小野双葉氏

わが社会福祉法人嬉泉より、この度二人の議員さんが相次いで当選いたしました。

お一人は、ここに投稿を寄せてくれた袖ヶ浦ひかりの学園で書記として仕事をしている仲田 豊さん。昨年十一月の袖ヶ浦町議会議員選挙で見事当選。

さらに、平成元年一月、袖ヶ浦のびろ学園初代の園長で、前号の「嬉泉の新聞」に投稿を寄せてくれた小野双葉氏が、岡山県倉敷市会議員選挙で当選。今は、嬉泉に身を置いていないとはいえ、OB



▲仲田 豊氏

としての強力な後援者のお一人です。

お二人のこの度の当選を心からお喜びすると共に今後のご活躍をお祈りしたいと思います。(友田)

## 袖ヶ浦町議会

### 議員に当選して

仲田 豊

十二月に入ったある日、山岸裕君が、私の所に来て議会議員に当選した感想を書いてくれ、と依頼があったので、山岸記者に協力の気持ちもあり、一筆書かせてもらいます。

私は、日頃から選挙のやり方について疑問を感じていましたが、

去る十一月の袖ヶ浦町議会議員の任期満了に伴う改選に当り、ついに意を決し、立候補に踏み切りました。私が、敢えて冒険に挑んだのは、今まで私の歩んできた仕事は、農協、土地開発公社、それに興味で参加している文化協会に關係した事、等で常に町の皆様と接する仕事が多かったので、この人たちの一人一人に訴えて歩いたら、少しは変わった選挙が出来るのでは...と思いついたからでした。

幸いにして、当選することが出来ましたが、これも偏に、私を知ってくださる多くの皆様方のお蔭であり、又、嬉泉の組織内でも直接あるいは間接に、ご支援下さった同志の方々のお力添えの賜と、感謝致しております。

この上は、公人としても、地域の為に一生懸命に働く決心です。で、どうかよろしくお願い致します。

(袖ヶ浦のびろ学園書記)

## ラテン・アメリカ

### 自閉症考

金ヶ江裕子

音楽教師として七年前、中米ホンジュラスに行った時から「音

楽」と「自閉症」にこだわって通算五年も外国に(それも発展途上国と言われる国々に)いすわってしまったのは、言うまでもなく、そこに自閉症がいたからだ。いや、こう書くとも後ろめたい。なぜなら、私は彼らに生かされていたに他ならないから。「ヒロコはAUTISMやってる」と、その範囲は狭いながらも世間に知れわたり、厳密に言うると、「音楽を通してAUTISMやっている日本人」でありえたわけだ。

外国にいると自分が何なのか、と感じることが、そして世の中にそれを示すことがとても重要で、プロ意識づけが自分の中だけでなく、世の中に対しても必要であるのだ。

くやしかったことが一つある。ホンジュラス国立リハビリセンターで、自閉症クラスを担当していた時、勤務二年目に所長が変わった。彼が就任した次の日に私を呼びつけて「あなたは一体何なのか。音楽の学士しか持っていないじゃないか。」と言ったのだ。「ムッ」ときたけれど返す言葉がない。二年の実績はあっても、それは前所長が認めてくれただけだ。証拠の紙があるわけではないのだから。とにかくその経験があつて

から、私はタイトル獲得のことを考えるようになり、紙で示されない「経験」というものに疑問を持った。しかしながら、帰国後社大に入り「紙」を得ても、私の不安はもっと大きくなっていったと思う。自閉症のことなど何もわかっていないじゃないかという不安。奨学金を得てメキシコ大学で勉強することになった時、「自閉症」じゃなく「学習障害」に重点を置いて勉強したのも、「自閉症」に対する自分の自信のなさを痛感していたからだと思う。



しかし、私の人生の大切な出会いは、やっぱり「自閉症」がきっかけだった。メキシコで勉強を終えて帰国しようとしていた時、ガビーという女性と知り合った。インテルコンティネンタル大学で教育学部長をしている彼女の強い要請により、一年という約束で音楽療法の講習会を開くこと、そして、自閉症施設建設プロジェクトの一スタッフとして参加することが、あつと言う間に決まってしまうのだ。

ホンジェラス・メキシコでの思い出は数多くあつてここには書き切れないが、あの時、私がまだ「自閉症」に対する自信のなさにこだわっていたら今の私はなかったであろうと思うのだ。ガビーと出会った時、「自閉症」と「音楽」は決して自分の人生から切り離せないのだと腹をくくり、開き直ったから、現在の小さいながらもメキシコ初めての「受容的交流療法」による自閉症施設ができたのだと思う。

前に戻るが、私が「自閉症」に生かされているというのは、やっぱり私の原点だ。何かやるぞ、と胸に秘め、肩に力をいっぱい入れて外国に出た私が、フット力を抜かれ、今素敵な気持ちで彼等に対することが出来る気がするの不思議だ。行動力にものをいわせて

やってきた海外での五年間、そしてこれから彼等が私に望むものはまた違うものであろうと新たに感じるこの頃である。

(袖ヶ浦ひかりの学園指導員)

### 指導員沼倉 実氏

#### ご結婚インタビュー

山岸 裕  
Q/今の奥さんと知り合ったきっかけは?

A/職場が同じだった。何となく知り合っていた。休みに、同僚たちとスキーに行ったり、グループ交際してたりして、つきあうきっかけが出来ていった。Q/どういうところにひかれたのですか?

A/美人で、正直で、あかるくて、やさしい人だったから。ボクの人目ボレです。毎日仕事しててたのしかった。彼女といると、疲れもふっとんじやった。(笑)

Q/フィアンセは、今年の春退職されましたけど、どおいう形で交際が続いたのですか?

A/二人とも自宅が千葉市にあたり、お互いのウチに遊びに行ったり、ドライブしたりして、交際を続けていた。

Q/フィアンセは、沼倉さんのどこに魅かれたんですか?

A/きつと、美男子で、誠実で、やさしいところだと思います。

Q/プロポーズはいつですか?

A/春頃にしました。

Q/正式な婚約はいつですか?

A/六十三年十一月三日。

Q/新居は?

A/祖母、両親と、三代同居の私の家。

Q/新婚旅行は?

A/ニューヨークへ、六日間の旅行。ミュージカルを見てください。

Q/どんな家庭にしたいですか?

A/話あっていけるような家庭にしたい。

〈解説〉  
当学園では、退職した女子職員と男子職員が結婚するケースがある。もう一つ、職場の同僚同志が結婚するケースがある。

理由は(一)職場で毎日接触しているうちに、男女が親しくなる。(二)それで、相手が同僚の場合、仕事を理解してくれる。それと、福祉労働者の場合、男女が知り合うチャンスが少ないから、職場結婚になりやすい。

と、私は推測している。

(袖ヶ浦ひかりの学園在園生)

# 私たちの

## レポート

### 須藤福祉センター各事業所からの報告

#### 「子どもの生活研究所 めばえ学園」紹介

小山 裕子

「おはようございます」「ほんの少し合わない間にお兄ちゃんになつたみたい」お母さんと先生の朝の挨拶で三学期が始まった。子ども達は、保育室でのお目当ての遊びに一目散に向かっていく。トランポリン・タイヤブランコ、マークが画いてある絵カードをひっぱり出してじっと見る子どもも、束の間の冬休みで静まりかえっていた保育室が、とたんに生き生きとよみがえる。

この「めばえ学園」は、昭和五五年に東京都の認可をうけた幼児の為の通園施設である。毎日十時から二時まで、発達上難しい問題をもつ三十人の子どもたち(大多数が自閉的傾向をもつ)が通ってくる。措置施設なので「子ども三十名に対して八名の保母・指導員」という条件の下で、一人一人

の指導目標・方針を明確にし、集団(三グループ編成)の中で可能な限り個性的な指導を心がけている。「給食」の場面を通して、めばえ学園の指導を紹介したい。

めばえ学園には専門の栄養士・調理員がいない。その年度に厨房の責任者になった職員が、メニューを考え、材料の発注・栄養計算の全てを行う。はじめは、好みの厳しい子ども達に食べてもらえよう工夫する中にも、年度によって「純家庭料理風給食」「ファースト・フード風給食」と個性豊かであった。その経過の中で、常識にとらわれないというか、徹底的に子ども好みが尊重されるメニューが生まれてきている。

毎日の料理も職員がお母さんと一緒につくる。少しでも良い治療的条件を整えたい。つまり、職員をできるだけ保育の場に投入したい為にお母さん達の御協力は本当に有難いことである。職員にとっても大変なことだが、せっぱつ

まって工夫したこのやり方もとても良い面があると感じている。保育終了後、片付けをしながら「今日の〇ちゃんこれ食べてくれた?」「きょうのウドンの汁はちょっとしょっぱかった」と会話がかわされる。「これは〇ちゃんが好きだから」と思いを込めて作られる給食は家庭の味がする。

しかし、保育室内の実際の給食場面は忙しい。第一に、特別に「食堂」という部屋がないので、食べている子どものお世話と食べた後の片付け、そして午後の保育室の設定が同時進行のように行われる。

第二に給食場面はとても良い「指導の場」になる。世に言う給



食指導とはいささかポイントが異なると思うが、だからこそ、我々が大事にしていることがはっきりと表れている。ある子どもは食べたいのに、すぐに食べ出せない。食器のふれ合う音、ざわざわした雰囲気の中で落着けないのだから。先生が一人つききりで、食べ出せるよう援助していく。「どれがほしいの? トントンして」「ほ

しい人、お皿を下さい」と要求の表現を求められている子どももいる。先生に対して分り易い要求表現をし、スムーズに食べることが出来る子ども達には「スプーンで食べたらかわいいよ」「ツルツルおうどんおいしいよ」「ポテトはこれでおしまい。こんどはお肉をたべよう」など、少しずつ先生がこうしてほしいと思うことを伝えていく。どの子どもにも、その時々ポイントがあり、子ども達の気持ちに動くのを待ちながら接していくので、先生達は忙しい。

「今日のおかずは何だっけ?」と気がついたらふりかけごはんだけで済ませてしまう日も多い。でもおいしいものを沢山食べた後の子ども達は、満足そうでもおだやかな表情をしている。

人の中にいて安心できる居心地の良さや、なだめられたり励ま

れたりして人に対応していく中で、その子どもが自分の要求を満たし、少しずつ先生の要求にも答えられるようになっていくことは、給食場面だけでなく、「個性的な遊びの時間」「簡単な課題や設定場面」そして部屋の移動やトイレへの誘いなどなど、子どもにふれ合っている時間全てが、人との関わりを育て、状況の理解をすすめる大事な指導の場になっている。

このような時や日々を積み重ねてくると、本当に子ども達は育ってくる。「話せるようになる」「字が書けるようになる」というような形で捉えるのではなく、確実に「人の子」らしく育ってくる姿を読みとる時本当に嬉しい。ひきこもり易く表情が乏しかったあの子のどこにこんなエネルギーがあったのかと思うほど、「嫌だ！」と声をはりあげ身ぶりで先生に訴えてくる。気持ちがあつかめないと思っていた子どもが「ああ自身がないんだ」「緊張しているんだ」「恥ずかしいんだ」と細やかな気持ちを持ただよわせてくる。得意な課題（たとえば愛のない事でも）を自信をもってやろうとしている姿や、できた時の誇らしげな顔、一人一人のありのままのそ

の子達が、生き生きと人と関わりをもって育ってきている。その実感が私たちの大切な宝である。

(めばえ学園指導員)

## ひまわり組の近況

声沢 昌人

ひまわり組は袖ヶ浦のびろ学園の1クラスです。男の子七名、女の子五名の十二名ののびろ学園で最も人数の少ない家庭的な雰囲気をもっとしていているクラスでもあります。のびろ学園では、午後五時より各クラスで三〇分間夕方のお集りを行っているのですが、ひまわり組でのお集りの様子をご紹介したいと思います。

「音楽鳴った、お集りする」毎日必ずN君のこの言葉からお集りは準備されだします。お集りをやりたいという気持ちもあるのですが、N君にとっては、お集りも一つのこだわりになっている傾向もあります。みんなN君の言葉と園内に流れる音楽を聞きながら、それぞれ自分の椅子を持ち、半円状に並べ、Sさんの「起立、きょうつけ、礼」でいよいよ始まります。この号令をかけるのは、Mさん、Kさんも時々やってくれますが、いずれも女子で、職員も含め

たひまわり組が「女性上位」である事を思わされる場面でもありません。

お集りの内容は、その日の担当の職員によって異なりますが、「お話し」「ボール投げ」「お絵かき」「音楽指導」「手遊び歌」等いろいろあります。

「お話し」では、今日一日の事等をお子さんに話してもらいます。「パン作業に行きました」「牧場に行って一輪車やった」と作業指導に参加したことを言ってくれるSさんとN君。しいの木養護学校の高等部へ行っているK君は「しいの木養護学校に行ってきた」。また、ミセス先生の個別指導を受けているHさんは「ミセ



ス、ミセス」等など、しっかり自分たちの一日をふりかえって話してくれそうです。こちらが「どこへ行きましたか？」と尋ねると、「散歩行った」と答えてくれるK君、「ドライブ行きました、ハイ」とAさん。「何を買いましたか？」で「カール」とうれしそうに返すR君もいます。言葉のないO君、Y君、A君は、こちらの問いかけに大きくうなずいてくれます。

今では、ほとんど毎日全員揃って和気あいあいやっていますが、このお集り一つ見ても、この一年間の「ひまわり組」のお子さんの成長を感じずにはいられません。昨年の四月頃には、こちらが呼びに回ってもなかなか集まってくれなかったのが、今では知らない内に全員集まっているという感じですが、お集りが無理なくお子さんのスケジュールの中にはいり、そこに参加することにそれぞれが自発的に喜び楽しみ等を見出してきてくれているのを感じます。

そして、そのことはお集り以外でも常に感じることであり、成長する可能性を持ち、この上もなく職員に求めてくる「ひまわり組」のお子さんたちと共に過ごせたこの一年間に感謝している今頃です。(袖ヶ浦のびろ学園指導員)